

つづ

つづの架

9

90/2

内的風景

ピープルズ・プラン21世紀

武藤 一羊

この世界とはすごいものだなあ、と思う。なるほどこれが世紀末かとも思う。一九八九年末へむけてのほんのわずかな期間に、ベルリンの壁に穴があき、チャウセスク王朝がふきとび、いままで顔のよくみえなかった東ヨーロッパの民衆が、何百万と街頭におどりでて、自分の国をとりもどす。ベレストロイカ〔改革〕をきっかけに動き出し、一気にはずみをつけた「社会主義」を名乗る国々のピープルの力は、世界史が動く、といったいきさか古典的な感慨をわたしのなかに喚起する。あの国、この国で革命がおこったというのとは違う。20世紀の大部分、とくに第二次大戦後の四十年を組み立ててきた構図そのものがふきとぼうとしているのである。またその構図に

支えられ、それを前提としてきた世界と時代についての認識の枠組みが崩れようとしている。同じ力は中国にもはたらいている。

動き出した力は疑いもなく解放的なものである。この力は民衆の力であるが、ただ民衆が動いたから解放的であるというのではない。ヒトラーも民衆の熱狂的支持のもとに第三帝国をうちたてた。進行中の過程はまったくそれとは無縁である。

ベレストロイカがグラスノスチ〔公開〕で始められたこと、そしてそれは一九五六年の中国の「百家争鳴、百花斉放」のベテン、あるいは及び腰とはちがって、社会の原則的な前提として言論の自由をときはなつたこと、はさわやかだ。トロツキー・タブーをふくめてロシア革命の歴史的総括が公然たる議論のまとなる。無表情で政治アパシーにおかされていたソ連帝国に、言論がよみがえり、奪い合うように新聞が読まれ、街頭討論が始まる。無数の文化政治グループが生まれ、利益集団が生まれ、論争し、提唱し、行動する。これを解放的であるといわずに何と呼ぶべきか。

このわきたつ民衆の再生のなかで、潰れようとしているのは「社会主義」だろうか。そうなのかもしれないし、そうでないかもしれない。しかしつぶされ、一掃さ

れつつあるのは、われわれにとってもすこしも惜しくない、いやもともと違和感のあった制度、しきたり、文化でもあった。「社会主義」を擁護するためには一緒に擁護しなければならぬように感じて、いろいろな理由を考案しなければのみこめない、いやそれでもけっしてよいとは感じられなかった何かであった。秘密警察、肅清、満場一致の決議、権力中枢の極度の秘密主義、権力が移動することにおこなわれる歴史の偽造、批判や異論はすべて帝国主義によるそそのかしとする説明。これらは「社会主義」と一体のものとなり、社会主義の国家的文化の原形となった。ビープルの再生によってふっとばされつつあるのがこの制度と文化であることは明らかだ。

だがそこから何が生まれるのか。始まった途方もない変化がどこに導くのか。それは誰も知らない。ことを始めた当事者たちにも知られていない。巨大な波濤は、先端が未来に開かれている。すなわち、それが崩れ落ちるのを受け止める既成の遊水池はどこにもない。そのところが、このプロセスの凄さ、そしておもしろさの核心にある。

アメリカ側はわが田に水を引けると信じているふしがある。世界資本主義は、広大な永遠の遊水池、あるいは受

け皿だとする尊大さが身についているのである。自由主義経済と議会制民主主義が、ついに共産主義に勝利をおさめた、社会主義と共産主義はついに破産を宣告された、とアメリカは、得意満面、宣言する。(その尻馬にのつてわが自由民主党は、自由民主主義の優越を語ってみせる。だがここではさしあたり選挙で有利にはたらこうか、といった範囲のことである。)

だが、この尊大さは、ながくはもたないだろうと思う。始まったのが恐ろしい歴史的深度をもったプロセスなのに、この尊大さは、そのなかに未知のものを認めることができないからである。そしてアメリカや日本が、「放蕩息子」を抱きとろうと待ち構えている資本主義世界は、それ自身、限界をはるかに越えた肥満によって、またその肥満がけっして克服できなかった第三世界の人類の多数派の貧困と抑圧によって、おそるべき爆発力をはらんでいる世界である。

この世界に「社会主義アンシアン・レジーム」を崩壊させつつある膨大な民衆の力がなだれこむ。それはもはや「壁」の向こうの出来事ではない。世界資本主義は「壁」に保護されることなく世界大で、それ自身に向き合う。共産主義のせいにもソ連のせいにもはやできないそれ自身の歴史的な矛盾に直面する。21世紀にむけて、

それを誰が解くことができるだろうか。

一九八九年夏、「ビーブルズ・プラン21世紀」という大規模な国際プログラムが日本列島を縦断しておこなわれた。わたしの属するアジア太平洋資料センターが最初の呼びかけをおこない、労働運動から女性たちの運動、またアイヌの運動、生協運動から農民団体までが、ゆるい連合を組んで、アジア太平洋を中心に二八〇人の国外の運動者とともに十八の国際会議をつぎつぎに開いた。アジア太平洋を中心にはあるが、21世紀を民衆「ビーブル」の側がどのように構想するか、そのため日本を含むアジア太平洋をどのように、誰の力で変革するかを打ち出す、そうという試みであった。

さまざまな国際会議からの結論は水俣にもちよられ、総括がおこなわれた。そして「水俣宣言」が採択された。この宣言は、いまから読み返してみても、かなり息の長いものだと感じられる。それは六月の天安門事件の後ではあるが、東ヨーロッパの激動とそれに続く大変動に先立つものである。だが21世紀に向けて、世界的にひとつの領域に合流した矛盾を「誰がいかに」解決するかという右にのべた大問題に、大胆な回答をあえてこころみただである。

「水俣宣言」は、20世紀の「進歩」と「開発」――

これが世界資本主義の産物でもあり理想でもある――が、環境の面でも、第三世界と世界資本主義の中核との貧富の格差の拡大の面でも、社会関係の分野でも、文化の分野でも、絶対的なゆきづまりにきていることを、今日の現実のなかから煮詰めることで、はっきりと描き出した。そして、それにたいするまったくあたらしい「進歩」や「発展」のパラダイムが必要であることを明らかにした。そうしたパラダイムは、加速される破壊的な「開発」への抵抗のなかにはらまれていて、それを全面化すること、オルタナティブな世界をかちとることができる、と問題をたてた。水俣の患者運動のリーダーである浜本二徳さんの「じゃなかしゃば」（こうでない世界）という予言的な言葉が、アジア太平洋の参加者すべてのものになった。

だが「誰が、いかにして」、「じゃなかしゃば」をもたらさうのか。水俣宣言の回答は、「世界の民衆」というものであるが、同時にこの世界民衆は、既成のものとして存在するわけではないと考えられている。世界が資本の手によって緊密に、しかも位階的に結合されているなかで、もっとも重要な決定は、第三世界の国家の外でおこなわれる。そのとき、その決定に影響される民衆

は、国境を越えて、決定中枢そのものにたいして介入する新しい普遍的権利を有する、と宣言はうたいあげた。民衆は、国家を越え、地域や階層や文化による分断を越えて、すなわち「越境」して、相互作用にはいり、そのなかで、「現存する分断、とくに南北に住む民衆の分断を乗り越えるあたらしい『ピープル』」が「次第に成長発展」と考えた。このようにしてつくりあげられる連合を、宣言は「希望の連合」と呼んだ。そしてそのなかに、「社会主義」世界におけるピープルの再生を位置づけたのである。宣言は言う。

社会主義諸国における改革は、東西の分裂を克服し、世界の規模で真に民主主義的な権力を確立しようとしている
社会主義諸国の兄弟姉妹たちとあたらしい連合をつくる機会をうみ出している。

米ソ二大帝国によって分割された戦後世界が崩れるなかで、われわれは21世紀に入る。抑圧的秩序であるにせよ、二つの帝国は戦後世界の秩序の担保者であったので、この旧秩序の崩壊は、やはりバンドラの箱を開けることになる。そこからは、あらゆる化け物もまた現れる。目の前にある抑圧的で唾棄すべき「社会主義」をふりすてる

なかで、こちらではもう絶対的限界にたっしている資本主義、とくにニッポン資本主義への幻想が、ひとびとの想像力をとらえる。民族的ショーヴィニズムも復活する。世界的に一見収拾不可能にみえるウチゲバ状況が拡がるかもしれない。そして、解放のためにたたかう第三世界の民衆は、かつてのように、ソ連帝国編入の危険はまぬがれるものの、米国の介入にたいしてソ連帝国の支持をあてにすることはできなくなる。第三世界は短期的には苦難の時期であろう。

新たな秩序を、二大帝国の構造をあてにして、また一般的に国家をたよりにして、獲得することは不可能なことが次第に明確になってゆくだろう。国境と集団間の境界を越えた民衆の自発的に造り上げる秩序によらなければ、秩序一般の再建ができないという時代にわれわれは急速に入りこみつつあるとわたしは思う。それがバンドラの箱に残る「希望」にはかならない。

しかしそれはどえらい希望である。

□

(水俣宣言と「ビープルズ・プラン21世紀」の詳細については、雑誌《世界から》36号、「ビープルズ・プラン21世紀」報告集参照。いずれも東京都千代田区神田神保町一―三〇 正光ビル アジア太平洋資料センター(電話〇三―二九一―五九〇一)

(むとう・いちよう／評論家)